新刊紹介

現代美學思潮

渡邊吉治氏著
第一書房刊行

美學と云ふ名にふさはしき學的體系は他の學問に比して最近の所生にかゝるとは云へ、美の感覺とその批評的意識は、他の價値と對等的、或は寧ろ自ら根源的位置をすら占めてゐたとも考へられやう。只その科學的反省のみがそれに伴はずして殘されてゐたと云へやう。卽着物よりも體の方が成長しすぎた孤兒の淋しさを美は常に、そして今も尙感じてゐる。そしてその原因の一つは、美學者のもつ運命によると云へやう。卽それは、美學者はベダントに陷るか、デイレッタントに陷るか、哲學者であるか藝術家であるかの二つの危險に曝されてゐる。藝術家であると共に哲學者であることのいかに困難であることかを私達ははつきり美學史の上に見る。美學の構成の遲滯と不振の責は人間の存在的構造がその一半を擔ふべきかとも思はれる。

この困難にもかゝはらず現今の、殊に日本の藝術批評界は實に眞晝の十字街の如き飽饒さを示してゐる。しかしそれはむしろ私達をして、いつか塵埃多き硏石の夜をまつ淋しさをさそはしむるものがある。今、われ〳〵に必要なることは、それがいかに哲學者でありすぎるか、いかにそれが藝術家でありすぎるかを見窮めつゝ、過去の美學を省みると共に、又自らの足下に氣を付ける事である。この時に渡邊吉治氏の現代美學思潮を得たことは、美學の一つの喜びであると共に、氏が先達故人となられし事があはせて悲しまるゝ次第である。著書は十九世紀後半、寧ろ一八七六年以後の半世紀の美學を廣く亙つてあますところなく、よき意味で普及的にこれを序述されてゐる。四六六頁の中に四二人の美學者を混亂に導くことなく親しく饗餐せしめ得ることは著者の外に俟たるべくもない。したがつて、この書より受くる人々の利益は、その各々の內容より抽出さるゝ知識のみならず、その全體或は關係の展望の上に、一種の交響を味ふを得るの特典であらう。云はゞ美學そのものゝ關するテンポをその中に抽出づる點に特徵を求むることが出來や。現今に課せられたる大小の美學問題の鍵鑰をこの中に求むるは餘りに多きものをこの書に求むると云へやう。それは故著者が約束して、悲しくも未だ半ばなりし「現代美學の諸題」に俟つべきであると信ずる。（定價參圓、中井紹介）

彙報

心理學讀書會

去る十月二十四日金曜午後三時半より心理學教室にて左の發表あり。

Lefèvre の「民族と言語」　木森　重樹君

十一月七日金曜午後三時半より同心理學教室に於て左の發表

視覺的知覺による對稱と非對稱　中山　覺君

社會學讀書會

十月二十九日夜樂友會館にて左の講演あり。

形式社會學の展開　岩崎　講師

十一月五日夜樂友會館にて同じく講演あり。

政治概念特に政治的權力の考察　大山　氏

教育研究會

十一月六日午後三時より樂友會館に於て、京都帝大佛教青年會と聯合にて左の講演會を開く。

華嚴經入法界品について　廣島文理科大學教授　福島　政雄氏

支那學會

十一月十五日土曜日午後六時より學生集會所に於て左の講演會を行つた。

引路菩薩の信仰について　塚本　善隆氏

題　未　定　中野長右衛門氏

美學會

十一月十二日水曜日午後一時半より樂友會館に於て深田博士追悼講演會を催す。

それから　藤田　貞次氏

藝術的空間の次元性　中井　正一氏

歌　懺　悔　須永　克巳氏

繪畫に於ける自然の再現　須田國太郎氏

藝術の意味　園　順三氏

藝術に於ける內なるものと外なるもの　植田　壽藏氏

美學讀書會

十月二十七日火曜日　樂友會館にて午後一時より

ベートーベンの交響樂　張　祥源氏

寄贈雜誌新聞

哲學雜誌　昭和五年十一月　五二五號

理　想　同十一月(現代宗教問題號)　二〇號

大谷學報　同十月　一一卷四號

教育問題研究　同十一月　五三號

丁酉倫理會講演集　同十一月　三三七號

社會學徒　同十一月　四卷一一號

大　東　同十一月　二五卷一一號

奈良縣教育　同十一月　二一一號

信濃教育　同十一月　五二九號

學校教育　同十一月　二〇九號

哲學研究　第百七十七號　二卷九號

雜誌索引

生理學研究　同十月、十一月　七卷一〇號、一一號

帝國大學新聞　昭和五年十月十三日、同十一月十日

寄贈圖書

形而上學とは何ぞや　ハイデガー著　湯原誠之助譯　理想社出版印刷　定價六拾錢

日本上代史研究試論　第一册　第二册　手塚弘保譯　非賣品

達人熊澤蕃山（人物研究叢刊第十一）　安岡正篤著　金鶏學院刊　定價貳拾錢

小樽高等商業學校一覽　昭和五年度　非賣品